

# くすりばこ



薬剤部  
名賀 芳晃

## 92. 風邪に抗生物質は効きません！

風邪をひいたとき病院にかかると、抗生物質(≒抗菌薬)を出されることが多いのではないのでしょうか。しかし、厚生労働省が作った薬の使用指針「抗微生物薬(抗菌薬+抗真菌薬+抗ウイルス薬)適正使用の手引き」では「風邪(≒感冒)に抗生物質は使わない」と書かれています。ではどうして風邪のときに抗生物質が出されるのでしょうか？

抗生物質には細菌を殺す効果があり、感染症の治療に欠かせない薬です。風邪にも広く使われており、全国の医療機関の使用状況は、急性上気道炎(風邪)の6割以上に抗生物質が使われていると報告されています。

しかし、風邪の原因の9割は、細菌よりはるかに小さいウイルスで、抗生物質は効きません。使用すると、逆に下痢、嘔吐などの副作用が増えるのです。

実は、多くの医師もこのことは知っています。それなのに抗生物質を処方するのは、風邪をこじらせて肺炎などになるのを防ごうと考えているからです。

そこで、厚労省は2017年、抗生物質の使用指針「抗微生物薬適正使用の手引き」を作り、薬が不要な場合と有効な場合を示しました。

それによると、急性気道感染症(風邪)は、大半を占める「感冒」のほか、「急性鼻副鼻腔炎」「急性咽頭炎」「急性気管支炎」に分けられています。

このうち感冒は、熱の有無にかかわらず、①鼻水、鼻づまり(鼻炎症状)、②喉の痛み(咽頭痛)、③咳、痰の3症状いずれもが表れる場合をいいます。手引きは、感冒に対して抗生物質を「使わないことを推奨する」としています。

急性鼻副鼻腔炎は、発熱の有無を問わず、くしゃみ、鼻汁、鼻閉を主症状とする病態を指します。喉の痛みが特に強ければ急性咽頭炎、せきやたんが長く続く場合(通常2~3週間)を急性気管支炎と呼びます。

急性咽頭炎は、細菌検査で溶連菌(A群β溶血性連鎖球菌)が検出された場合に限り抗生物質を使用します。

急性気管支炎は、慢性呼吸器疾患などの持病がある人や百日ぜきを除き、抗生物質を使いません。薬を使っても、せきが早く治まるわけではないからです。

結局、風邪の中で抗生物質が必要なのは、ごく一握りで、1割にも満たないのです。

厚労省が手引きを作成したのは、抗生物質の使い過ぎで、薬の効かない「薬剤耐性菌」が問題になっているからです。不適正な抗微生物薬使用に対してこのまま何も対策が講じられなければ、2050年には全世界で年間1,000万人が薬剤耐性菌により死亡することが推定されています。

また、1980年代以降、新たな抗微生物薬の開発は減少する一方で、病院内を中心に新たな薬剤耐性菌の脅威が増加していることから、抗微生物薬を適正に使用しなければ、将来的に感染症を治療する際に有効な抗菌薬が存在しないという事態になることが憂慮されています。

風邪など軽い症状に乱用していると、肝心な時に効かなくなってしまうのです。風邪で病院にかかって、抗生物質が出ないからといって、決して不安にならないでください。風邪は自己免疫で治ることがほとんどです。大事なものは栄養補給と休息です。お薬は症状緩和のお手伝いをしているだけです。

